

はしがき

本書の執筆が終盤にさしかかった2019年暮れ、突然、新型コロナウイルスによる感染症が中国で発生し、瞬く間に世界中に広がりました。そのとき、欧米の指導者が強力なトップダウンの戦略を行使したのとは比べ、日本政府の姿勢は成り行き任せと思えるほど消極的なものでした。このコントラストは、皮肉にも言語学の研究書である本書が提示する〈点〉対〈線〉の対立原理を映し出しているように見えます。荒っぽく言うと、〈点〉とは「個」あるいは「全体（まるごと）」を重視した事物の捉え方、〈線〉とは社会における人間のつながりを重視した事物の捉え方です。コロナ禍は別にしても、多くの国で自国という〈点〉を最重要視する考え方が台頭し、世界の協調的な〈線〉が崩れようとしています。このような時代にこそ、人間にとって一番大切なものは何かを改めて考えるべきでしょう。

人間にとって最も大切なのは人と人とのつながりであり、人と人とのつながりを促進するのが言語です。言語の役割はコミュニケーションだけではありません。言語は人類が発展するために必要な思考力や創造力を育みます。人間の言語は人類に固有の生物学的特性であると同時に、個々の言語社会・言語文化においてそれぞれの個性を生み出します。言語の研究は人間そのものの研究なのです。

しかし、言語の研究といっても昭和から平成へと続いてきた〈縦割り式〉の手法を今後もそのまま受け継ぐのでは、学術的なブレイクスルーは期待できません。伝統的な国語学・日本語の研究は国内に狭く閉じこもりがちで、国際的な発信力に欠けました。また、日本語固有の研究テーマを追求するあまり、世界の言語研究の潮流に幅広く目を配ることもあまり得意ではありませんでした。

このような状況に鑑み、私は2009年から2017年まで国立国語研究所の所長として、言語学出版で世界的に定評のあるドイツのMouton出版社と提携し日本語研究の多様な成果を国際発信する〈Handbooks of Japanese Language and Linguistics〉というシリーズを刊行しました。また、世界の最

前線の言語研究を展望する、オックスフォード大学出版の〈Oxford Research Encyclopedia of Linguistics Online〉の編集顧問を委嘱され、日本語関係の国内外の様々な研究状況を世界に紹介する仕事にも携わりました。

こういった活動を踏まえながら、本書では筆者が過去 50 年近くにわたって続けてきた研究を〈点〉と〈線〉という観点から整理し直しました。データ面では以前の発表論文を再利用したところが多いのですが、〈点〉と〈線〉という切り口による全体像の整理と解明はまったく新しい着想です。この考えは、個人という〈点〉を重視する英語社会と、人と人とのつながりという〈線〉を尊重する日本語社会の特徴を浮き彫りにするだけでなく、多くの面で対照的な英語と日本語の文法・意味・語彙・形態・表現法など言語構造の違いを際立たせるのにもピッタリの概念です。

内容は専門的ですが、言語学と隣接分野を橋渡しする入門書として役立つように工夫をこらしました。各章の末尾には練習問題も付けています*。

- ①専門的な研究から言語学初心者への橋渡し [特殊な用語を避ける]
- ②日本語研究と英語学・言語学との橋渡し [日本語を世界諸言語の中で捉える]
- ③海外の研究と国内の研究の橋渡し [国際的な文献を多く引用]
- ④昭和・平成の研究から令和以降の研究への橋渡し [過去の主要な成果の取りまとめ]
- ⑤言語の研究から文化の研究への橋渡し [少しだが言語文化にも触れる]

本書が橋渡しとなって様々な分野が将来的に連携し、言語と人間社会を包括した研究へとつながることを願っています。

最後に、くろしお出版とは先々代の社長のときからのお付き合いで、本書を含めて合計 15 冊の編著書を出版していただきました。40 年にわたって私の研究を支えてくださり、ありがとうございました。

2021 年 7 月
影山太郎

*問題の解答例は https://www.9640.jp/MATERIALS/875/875_answer.pdf にて公開しています。

目次

	はしがき	i
第1章	言語の中の〈点〉と〈線〉とは—日英語の対照研究を超えて—	1
1.1	本書の目指すところ	1
1.2	言語類型論と日本語	3
1.2.1	語形に基づく言語類型	3
1.2.2	〈する〉対〈なる〉の日英語対照研究	5
1.3	言語類型のパラメータとしての〈点〉と〈線〉	9
1.3.1	言語の中の〈点〉と〈線〉	9
1.3.2	形の〈線〉と意味の〈線〉	11
1.4	本書の構成	13
	理解を深めるために	15
第2章	言語文化と語用論の〈点〉と〈線〉	17
	—個を重視する英語とつながりを尊ぶ日本語—	
2.1	日英語の発想と表現法	17
2.2	〈線的〉なつながりを尊重する日本語文化	20
2.3	語用論における〈点〉と〈線〉	22
2.3.1	対人関係と丁寧さ	22
2.3.2	代名詞, 指示詞, 「行く, 来る」動詞	24
2.3.3	感謝と謝罪	29
2.4	〈点〉から〈線〉を作る日本語	31
2.4.1	右方向への〈線〉の伸長	31
2.4.2	左方向への〈線〉の伸長	37
2.4.3	〈線〉の切り取り	40
	理解を深めるために	41
第3章	アスペクト意味論の〈点〉と〈線〉	43
	—出来事の丸ごと把握と段階的把握—	
3.1	事象の捉え方とアスペクト	43

3.1.1	事象の構造と時間情報	43
3.1.2	パーフェクティブな事象把握とインパーフェクティブな事象把握	46
3.2	動詞(句)のアスペクト	47
3.2.1	金田一(1950)とVendler(1967)	47
3.2.2	日英語の状態動詞と進行形	49
3.3	「燃やしたけれど燃えなかった」構文	51
3.4	移動の構文と英語の着点指向	54
3.4.1	移動動詞と経路の概念	54
3.4.2	移動様態動詞と着点	56
3.4.3	中間経路と着点を橋渡しする前置詞 to	58
3.5	移動の構文と日本語の中間経路指向	60
3.5.1	目的語としての中間経路	60
3.5.2	中間経路と「東京まで寝ていた」構文	63
	理解を深めるために	67
第4章	構文論における〈点〉と〈線〉	69
	—結果重視の英語と過程重視の日本語—	
4.1	事象の捉え方と構文	69
4.2	状態の変化と結果構文	70
4.2.1	英語の結果構文	70
4.2.2	日本語の結果構文	73
4.3	物の授受と二重目的語構文	75
4.3.1	英語の二重目的語構文	75
4.3.2	日本語の二重目的語構文	77
4.4	受身文における主語と動作主のつながり	81
4.4.1	英語の受身文と日本語の受身文	81
4.4.2	直接受身文と間接受身文	82
4.4.3	動作主マーカーとしての「に」の性質	87
4.4.4	状態変化の受身文	89
4.4.5	主語と二格名詞句の〈線的〉なつながり	91
4.5	動詞の自他交替と主語の選択	92
4.5.1	事象認識のパターンと自他交替の形態	92
4.5.2	自動詞から他動詞への使役化	95
4.5.3	他動詞から自動詞へ(I) —日英語に共通の反使役化—	97
4.5.4	他動詞から自動詞へ(II) —日本語特有の脱使役化—	101
	理解を深めるために	104

第5章	動詞から右方向への〈線〉の展開	107
	—レキシコンと膠着的な述語連鎖の仕組み—	
5.1	日本語レキシコンの基礎	107
5.1.1	語彙層—和語, 漢語, 西洋語, オノマトペ—	108
5.1.2	品詞—動名詞と形容名詞を中心に—	110
5.1.3	接辞, 接語, 附属語	114
5.2	レキシコンにおける述語形成の仕組み	117
5.2.1	連結型と非連結型の語形成	117
5.2.2	「事故る」型の動詞の特殊性	121
5.2.3	レキシコンで作られる動詞の性質	125
5.3	文構造における述語形成の仕組み	126
5.3.1	文構造で作用する述語要素	126
5.3.2	文構造における述語要素の順序	127
5.4	述語連鎖における活用と屈折の役割	132
	理解を深めるために	140
第6章	出来事の展開を〈線〉につなげる補助動詞群	141
	—動詞の文法化と意味の機能化—	
6.1	動詞と補助動詞と助動詞	141
6.2	アジア諸言語の補助動詞	143
6.3	現在と未来をつなぐテ形接続の補助動詞	146
6.4	文法的アスペクトと統語的複合動詞	153
6.5	語彙的複合動詞とアスペクト補助動詞	157
6.5.1	主題関係の複合動詞	158
6.5.2	語彙的アスペクトの複合動詞	159
6.5.3	「論文を書き上げる」と「論文が書き上がる」	165
6.6	語彙的アスペクト複合動詞の歴史的な成り立ち	170
6.7	丁寧と侮蔑の助動詞	175
6.8	日本語の補助動詞群から一般理論へ	177
	理解を深めるために	180
第7章	動詞から左方向への〈線〉の展開	183
	—名詞+動詞型の複合動詞と軽動詞構文—	
7.1	名詞+動詞型の複合動詞と形態的な〈線〉の形成	183
7.1.1	「名詞+時制付き動詞」型の複合動詞	184

7.1.2	複合動詞と名詞抱合	188
7.2	時制を持たない「名詞＋動詞」型の複合動詞	191
7.2.1	形容詞的用法と副詞的用法の複合動詞	191
7.2.2	時制屈折のない複合述語	196
7.3	軽動詞構文と意味的な〈線〉の形成	200
7.3.1	動詞イディオムの意味と構造	200
7.3.2	「彼女には婚約者がある」型の軽動詞構文	202
7.3.3	「講演会に参加者がある」型の軽動詞構文	206
7.3.4	「北海道に出張をする」型の軽動詞構文	211
7.4	文法システムと複合動詞の形成レベル	212
7.4.1	複合動詞と軽動詞構文における名詞の省略	213
7.4.2	3つのレベルの複合述語形成	217
	理解を深めるために	222
第8章	日本語の〈線的〉性質と叙述タイプ	223
	—事象叙述, 属性叙述, 身体感觉叙述—	
8.1	デキゴトとモノの言語学	223
8.1.1	事象叙述と属性叙述の意味と構文	224
8.1.2	2種類の属性—生得的属性と獲得的属性—	227
8.1.3	文法規則が破られるとき	228
8.2	「青い目をしている」型の軽動詞構文と属性叙述	229
8.2.1	動詞「する」に関する制限	230
8.2.2	目的語名詞に関する制限	232
8.2.3	不定の身体部位名詞と軽動詞構文	234
8.2.4	属性叙述構文における形と意味のミスマッチ	235
8.3	「動作主＋他動詞」型の複合語と2種類の属性	239
8.3.1	「動作主＋他動詞」型の複合語	240
8.3.2	生得的属性と獲得的属性の本質	244
8.3.3	生得的属性とカキ料理構文	247
8.4	オノマトペと身体感觉叙述	248
8.5	結びにかえて—人間と動物と人工知能—	256
	理解を深めるために	257
	引用文献	259
	項目索引	273
	言語索引	277
	著者略歴	278

第 1 章

言語の中の〈点〉と〈線〉とは

—日英語の対照研究を超えて—

1.1 本書の目指すところ

本書は〈点〉と〈線〉という、これまでになかった観点から英語やほかの外国語と対照することで、日本語の本質を総合的に明らかにする。日英語の対照研究では、池上(1981)の〈する〉対〈なる〉をはじめ、両言語の特徴的な表現パターンの違いに着目した類型化の試みが行われてきた。本書の〈点〉対〈線〉の着想はこういった過去の提案にとって代わるというより、それらを総合的に捉え直し、より高いレベルで一般化する試みである。

〈点〉と〈線〉とは、それぞれ〈個 (individual)〉と〈つながり (link)〉と言い換えてもよい。英語は物事をひとつの個、すなわち〈点的〉な塊として捉える傾向の強い言語、日本語は物事を〈線的〉なつながりとして捉えるのが得意な言語である。この違いは音声、語彙、文法、語構造、意味、表現法、対人関係など多方面で観察される。身近な例をいくつか見てみよう。

- ◆音声に関して、筆者の氏名は日本語で発音するとカゲヤマタロウのように「ゲ」から「タ」まで高いピッチが〈線状〉につながっているが、英語式の発音では TAroo kageYama というように ta の部分と ya の部分が〈点的〉にピンポイントで強く発音される。
- ◆意味と発想に関しては、日本語で「すぐに行きます」のように移動の動詞を用いて〈線的〉な動きを表すところを、英語では "I'll be there

第2章

言語文化と語用論の〈点〉と〈線〉

—個を重視する英語とつながりを尊ぶ日本語—

本章の ねらい

前章で導入した〈点〉と〈線〉の言語類型を、言語文化と語用論に関する日常的な現象で例証する。英語社会は個人という〈点〉を重視し、日本語社会は社会における人と人とのつながりという〈線〉を尊重する。この違いは、日英語の発想と表現法（第2.1節）、日本文化の慣習（第2.2節）、対人関係の配慮と丁寧さ（第2.3節）で浮き彫りになる。さらに、〈線〉重視の日本語は本来なら〈点〉として捉えられる要素を〈線〉に変えて表現する方法を発達させている（第2.4節）。

2.1 日英語の発想と表現法

アメリカ系のファストフード店でハンバーガーを注文した。出てきた商品の箱を開けてみると、蓋の裏側に(1)のメッセージが書かれていた。

(1)



この2つのメッセージはそれぞれ英語らしい表現、日本語らしい表現だと感じられる。英語の“MADE FOR YOU”は商品の出来上がりに焦点をあてた受身形で、動作主（他動詞 make の主語）の姿が消えている。逆に、日本語のメッセージでは、「受ける」、「作る」が他動詞であることから分かるよ

第3章

アスペクト意味論の〈点〉と〈線〉

—出来事の丸ごと把握と段階的把握—

本章の ねらい

前章で観察した語用論と言語文化における日英語の違いの土台となるのは、日常の出来事をどのように捉えて言語化するかという外界認識の仕方である。英語話者は出来事を丸ごと捉える傾向が強く、日本語話者は出来事の進み具合に着目する傾向がある。本章では出来事のアスペクト(継続や終了)に関係する意味論の基礎概念を第3.1節で説明したあと、動詞(句)のアスペクト分類(第3.2節)、「燃やしたけれど燃えなかった」構文(第3.3節)、移動と到着(第3.4節)、移動と中間経路(第3.5節)といった具体的な項目を日英語で対比し、〈点〉と〈線〉の考え方を強化していく。

3.1 事象の捉え方とアスペクト

本書で提示している〈点〉と〈線〉の対立は日英語の多岐の分野にまたがって観察されるが、その根底にあるのは事象の認識の仕方である。事象(eventuality)とは出来事、動作、変化、状態などをひっくるめた呼び名で、「状況」や「事態」と呼ばれることもある。言語の主要な機能はいつでもどのような事象が起こったかを人に伝えることであるから、事象に関する研究は生成文法、認知意味論、形式意味論の理論枠に係わりなく1990年ごろから世界的に爆発的な進展を遂げた。

3.1.1 事象の構造と時間情報

事象を分析する際の基礎は、時間の流れによって事態がどう変化するかを考えることである。時間の流れは連続的であるが、言語の分析としては①開

第4章

構文論における〈点〉と〈線〉

—結果重視の英語と過程重視の日本語—

本章の ねらい

〈点的〉指向の英語では、パーフェクティブな観点から出来事を塊として捉える傾向が強いため、話者の視線は出来事の結果という1点に注がれる。他方、〈線的〉指向の日本語では、インパーフェクティブな捉え方に基づいて出来事の進行や経過を段階的に把握する。この外界認識の相違は、具体的な事象を表現する構文（文構造）に直接反映される。本章では、英語が得意とする構文として結果構文（第4.2節）と二重目的語構文（第4.3節）を、また、日本語が得意とする構文として受身文（第4.4節）と自動詞・他動詞の交替（第4.5節）を取り上げ、それぞれの言語の特徴を浮き彫りにする。

4.1 事象の捉え方と構文

これまでの章から分かってきたように、同じ状況を表現するのでも日本語話者と英語話者とは表現法に特徴的な違いがある。(1)に図解するように、日本語話者は出来事の成り行きや進み具合という〈線〉に関心をはらい、英語話者は出来事の結果がどうなったかという〈点〉に着目する。



この意味的な違いは各々の言語の文構造（構文）に反映される。

第5章

動詞から右方向への〈線〉の展開

—レキシコンと膠着的な述語連鎖の仕組み—

本章の ねらい

膠着型言語としての日本語の〈線的〉な特徴が際立って現れるのは、動詞から右方向に補助動詞、使役、受身、否定、時制などの諸要素を数珠つなぎに連ねていく述語の連鎖である。第5.3節と5.4節では、複数の述語が〈線〉としてつながれる仕組みが活用語尾の「膠」としての働きによって可能になることを明らかにする。その前に第5.1節と5.2節では、述語を作るための素材を提供するレキシコン（辞書と語形成）のシステムを素描する。述語の膠着的な連続には、レキシコンに蓄えられた種々の語彙情報が重要な役割を果たしている。

5.1 日本語レキシコンの基礎

日本語は、英語などのヨーロッパ言語と異なり、複数の動詞の組み合わせや名詞と動詞の組み合わせによって多様な複合動詞・複雑動詞を活発に産出し、それによってきめ細やかな描写力を獲得している（Kageyama 2017）。本章からは、動詞を軸とする日本語の諸特徴を見ていくが、その前に、動詞その他の単語を作る仕組みを概観しておこう。

私たちが言語を使うときに拠り所となるのは単語である。母語話者は単語を脳に記憶しているわけだが、人間は既存の単語を記憶するだけでなく、新しい単語を作り、理解することもできる。話者が脳に蓄えている辞書（脳内辞書、心的辞書）と、辞書の情報に基づいて複雑な単語を作る語形成（造語法）のシステムを合わせてレキシコン（lexicon）と言う。

第6章

出来事の展開を〈線〉につなげる 補助動詞群

—動詞の文法化と意味の機能化—

本章の ねらい

前章で明らかにした述語連鎖のメカニズムを背景にして、本章では述語連鎖に参加する具体的な補助動詞を分析する。補助動詞は「咲き誇る」や「暮れなずむ」などの複合動詞、「衝突しかける」や「遊びまくる」のような文法的アスペクト、「帰ってしまう」や「貯金しておく」のようなテ形構文、さらには「行きます」のような丁寧語、「言いやがる」のような侮蔑語などに現れる。これらは本来の動詞から助動詞への文法化の流れの中に整然と位置づけられる。日本語とよく似た補助動詞のシステムがアジア諸言語にも見られることから、ヨーロッパ言語中心の研究に対して新たな洞察を提供する。

6.1 動詞と補助動詞と助動詞

通常、ひとつの動詞はひとつの事象（動作，出来事，変化，状態など）を表す。たとえば「眠る」という動詞は、ある時間のあいだ身体の活動が休止して無意識の状態になることを意味する。それ以上に複雑な状況—たとえば、いま眠ろうとしているとか、既に眠りに入っているとか、あるいは熟睡しているとか—を描写しようとするとき、日本語では「眠りかける」、「眠ってしまう」、「眠り込む」、「眠りこける」のように補助的な動詞を主動詞「眠る」のあとに追加して意味を補うという手段をとる。これらの補助的な動詞は過去形「眠りかけた」、否定形「眠りかけない」、仮定形「眠りかけたら」のように活用するから動詞の一種であることに間違いない。

英語でも、動詞が表す事象の意味を展開することができるが、日本語とは手段が異なる。英語では複数の動詞を連ねる代わりに、talk away（しゃべ

第7章

動詞から左方向への〈線〉の展開

—名詞＋動詞型の複合動詞と軽動詞構文—

本章の ねらい

第5・6章で見たように、動詞から右側は活用形が接着剤となって各種の述語要素が形態的な〈線〉でつながる。ところが、活用形は動詞から左側では利用できない。本章では動詞の左方向に〈線〉をつなぐ方策として、「精だす」や「道行く(人々)」のように名詞＋動詞型の複合語によって形態的な〈線〉を作る方法だけでなく、「彼女には婚約者がある」、「大会には参加者が大勢あった」、「九州に出張をした」といった軽動詞構文において名詞の不定性を利用して意味的な〈線〉を構築する方法も活用されることを明らかにする。日本語の真髄は、これらの多様な複合述語が整然とした体系を構成することにある。

7.1 名詞＋動詞型の複合動詞と形態的な〈線〉の形成

文の構造は動詞より右側の述部の領域と動詞より左側の名詞句の領域に大別できる。述語の領域は活用形が^{にかわ}膠となって、各種の補助動詞や助動詞が形態的な〈線〉としてつながる(第5章5.4節)。ところが、名詞句の領域では、格助詞や副助詞が自立性のある附属語(第5章5.1.3節)であるため、名詞とくっつかない。そこで、動詞とその前にくる要素を形態的な〈線〉でつなぐためには、複合語という形式—「名詞＋動詞」型の複合動詞—が必要になる。この組み合わせの複合動詞は古代からあったと考えられ(阪倉1966, 衣畑2010)、現代語でも限られた範囲ではあるが使用されている。

名詞＋動詞型の複合動詞は、複統合型言語の多くに見られる名詞抱合と見かけが似ている。比較的単純な例(1)を見てみよう。

第8章

日本語の〈線的〉性質と叙述タイプ

—事象叙述, 属性叙述, 身体感覚叙述—

本章の ねらい

これまでの章では語用論から意味論, 形態論, 統語論, 語彙論に及ぶ広範囲の現象において, 日本語の〈線的〉な性質が行き渡っていることを見た。この〈線的〉な特徴はさらに, 人間言語の本質を知る上でも重要な手がかりを提供してくれる。言語は「いつ誰が何をどうした」を伝えるコミュニケーションの機能(事象叙述)だけでなく, 知らない事物について「これは何々だ」とその性質を判断する〈属性叙述〉の機能があり, さらに, 「あっ, 目まいがする!」のように話者本人が体内の生理的感覚を無意識に表出する〈身体感覚叙述〉の機能もある。これら3つの機能を総合的に解明することではじめて, 人間の言語が動物の言語あるいは人工知能の言語と比べてどれほど素晴らしいのかを理解することができる。

8.1 デキゴトとモノの言語学

英語の授業では「5W1H」—who, what, when, where, why, how—を明確に述べるのが作文のこつだと指導される。これは適格なコミュニケーションを行うための重要な指針で, 日本語にも有効である。しかしながら, コミュニケーションだけが言語の役割ではない。(1)を見てみよう。

- (1) a. 昨日 ビーバーが コロラド川の上流で せっせと ダムを造っている姿が確認された。
- b. ビーバーというのは, (*明日) (*コロラド川の上流で) (*せっせと) ダムを造る (ものだ)。

レベル0の感嘆詞、レベル1の身体感覚叙述、そしてレベル2の属性叙述の3つは、人間以外の動物でも持っている。しかしながら、レベル3の、現実と架空、過去・現在・未来の時空間を自由に操る事象叙述は、人間言語だけの特質だろう。これは、Hockett (1960) が挙げた人間言語の諸特徴の中で“displacement” (時空間の超越性) にあたると考えてよいだろう。他方、人工知能 (AI) はレベル2 (カテゴリーの判断) が最も得意で、レベル2の情報を組み合わせることで、おそらくレベル3にも対処できるだろう。しかしながら、心のある生き物に特有のレベル1 (身体感覚) とレベル0 (感嘆詞) とは相容れないと想像できる。

これから先、地球上で人間が動物とも人工知能とも幸せに共生していくためには、このような仕組みの理解を深めていくことが肝要だろう。

理解を深めるために

【1】「動作主 + 他動詞」の組み合わせには本文で説明した A 型、B 型のほかに次のようなタイプもある。

(i) 連体詞タイプ

市民待望の駅ビル建設, 大統領期待の治療薬, 女性必見のお買い得情報, 当店お勧めのワイン, ビジネスマン必携の辞書, 職人入魂の作品, マニア垂涎のアイテム

(ii) 新聞見だしタイプ

コロナショック直撃のタクシー業界, 気象庁発表の台風情報, 野党議員提出の質問書, 山形県警逮捕の振り込め詐欺団, 武豊騎乗のハルウララ

(i), (ii) のタイプは本文の A 型、B 型とどのように違うだろうか。

【ヒント 1】複合語なら動作主と述語の両方が必要だが、(i), (ii) のどちらかは動作主を表す名詞を省略することができる。

【ヒント 2】本文の例 (38), (39) に例示したように A 型、B 型は属性叙述なので、特定の時間や場所を表す副詞を付けることができな

い。(i), (ii) ではどうだろうか？

[2] 次の例文は事象叙述, 属性叙述, 身体感覚叙述のいずれに分類されるだろうか。そう判断する理由も説明しなさい。

- a. あの受験生の答案用紙は今のところ白紙です。
- b. 周囲から好かれる人というのは、素直な性格をしている。
- c. 課長は、いつもパソコンの前で困った顔をしている。
- d. もう、腹が立つ！
- e. 私は、その日のことを思い出すたびに腹が立つ。
- f. 舞台に立つと、心臓がバクバクするネ。
- g. ああ、膝がガクガクするヨォー。
- h. 問題な日本語というのは、問題の日本語というのと意味が違います。

[3] 本書全体の復習として、「膠着型言語」とされる日本語の本質が具体的にどのような現象に現れているのか整理しなさい。

- a. 形態的な〈線〉とは、どのようなものか。
- b. 意味的な〈線〉とは、どのようなものか。
- c. 語用論における〈線〉とは、どのようなものか。